

胃がんの進行度と治療

胃がんの進行度（ステージ）は、深さ（深達度）とリンパ節転移で決まります。

胃がんの進行度（深達度）

- T 1 粘膜、粘膜下層にとどまる
- T 2 固有筋層までにとどまる
- T 3 漿膜下組織までにとどまる
- T 4 a 漿膜を超えて胃の表面にでている
- T 4 b ほかの臓器にも広がっている

がんは粘膜から発生します

約1mm

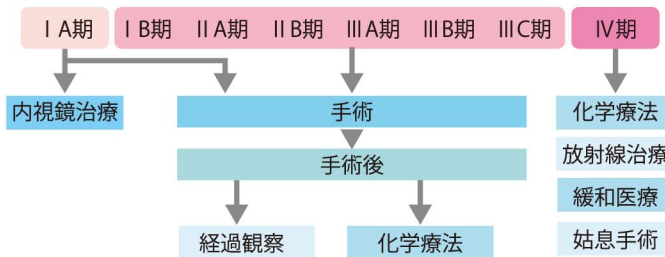
胃の表面

粘膜炎より深くなるとリンパ節転移が occurs. 深達度が深くなるほど転移しやすくなります。

リンパ節転移				
	なし	1-2個	3-6個	7個以上
T1	I A期	I B期	II A期	II B期
T2	I B期	II A期	II B期	III A期
T3	II A期	II B期	III A期	III B期
T4a	II B期	III A期	III B期	III C期
T4b	III B期	III B期	III C期	III C期

IV期…肝転移・腹膜転移・領域リンパ節以外転移・腹腔細胞診でがん細胞を認める

胃がんの治療



胃がんの転移

リンパ行性転移

リンパ節から次のリンパ節へと順番に広がる

血行性転移

血に乗ってがんが転移する

腹膜播種性転移

胃の外に出たがんがお腹にばら撒かれ転移が起こる

内視鏡治療

胃がんは、必ず粘膜から発生します。この段階（I A期）であれば胃カメラで治療できる可能性があります。内視鏡の粘膜切除術は、身体への負担が少なく開腹手術に比べ入院期間も短期間となります。



早期がん

開腹手術・腹腔鏡手術

がんが粘膜下層より深くなると、手術が必要になります。通常、胃の3分の2以上の切除、または、胃の全摘手術を行います。

進行がん

抗がん剤治療（化学療法）

血行性転移・腹膜播種性転移の場合、手術では根治できないため、抗がん剤治療が基本となります。抗腫瘍効果が高く副作用の少ない抗がん剤の開発や副作用を軽減する治療法の進歩（制吐剤など）、チーム医療による治療サポートなどにより外来通院での抗がん剤治療ができるようになりました。



● 抗がん剤の副作用

白血球減少（感染）、血小板減少（出血）、食欲低下、悪心・嘔吐、下痢、倦怠感、脱毛、手足のしびれ など

欠点

抗がん剤の効果が続く限り、副作用が許容範囲である限り、治療を続けていくことが重要です。

がん診療の地域医療連携

胃がんを治るレベルで発見するには、症状が出る前に検診や人間ドックを定期的に受けることが大切です。症状がでた時には、かなり進行しています。胃がんの5年生存率※1はI A期であれば93.4%、IV期だと16.6%まで下がります。

（※1胃がん治療ガイドライン2001年12月版）

胃がんと診断されてからは、かかりつけ医と市立豊中病院とで連携して診察・治療にあたります。

早期発見・早期治療のために
がん検診を定期的に受けましょう！

